

災害ミュージアムを通じた記憶の 継承に関する一考察 —地震災害のミュージアムを中心に—

阪本 真由美*・矢守 克也**

The Perspective of Memory Transference through Natural Disaster Museums

Mayumi SAKAMOTO* and Katsuya YAMORI**

Abstract

Many natural disaster museums have been established in disaster-stricken areas as a means of transferring past disaster experiences. Although these museums emphasize the importance of disaster memory transference, some exhibit images but no memories. As a “place of memory,” the museum has the power to recall not only past memories, but to evoke new ones. In this study we focus on memory transference through natural disaster museums. First, we review the concept of memory and approaches that previous studies have taken toward examining the exhibition of memory in museums. Then, we analyze exhibits that attempt to convey memories in recently-established museums dedicated to memorializing disaster. Finally, we use our findings to propose understanding natural disaster museums through the perspective of memory transference.

キーワード：災害ミュージアム，記憶

Key words： natural disaster museum, memory

1. はじめに

近年、巨大災害に見舞われた被災地では、地域で起こった災害に関する資料を展示するミュージアムの設置が相次いでいる。1995年の阪神・淡路大震災の後に設置された「阪神・淡路大震災記

念 人と防災未来センター」(以下、「人と防災未来センター」)、「北淡震災記念公園 野島断層保存館」, 1999年のトルコのマルマラ地震災害の後に設置された「地震文化博物館」, 台湾の集集地震の後に設置された「九二一地震教育園區」, 2004年の

* 公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構人と防災未来センター
Disaster Reduction and Human Renovation Institution

** 京都大学防災研究所
Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

本論文に対する討論は平成23年2月末日まで受け付ける。

インド洋津波災害の後に建設された「津波博物館」などである。本研究では、これらの災害に関する資料を収集・保存するとともに展示を行っている施設を災害ミュージアムとする¹⁾。

災害ミュージアムの多くは、災害という出来事を忘れないこと、それによる教訓を伝えることを目的に掲げている。しかしながら、その一方で、災害という出来事の多様な記憶を表象する場としては機能しておらず、それ故に、災害の記憶の継承が難しいのではないかという議論もみられる。

本研究の目的は、災害ミュージアムを通じた、災害の記憶継承について考察し、その一助になることにある。本研究はまず、記憶の概念とミュージアムにおける記憶の展示について先行研究を通して整理する。次に、近年、巨大災害に見舞われた被災地に設置された災害ミュージアムで行われている展示を、記憶に着目して分析する。以上の議論を踏まえ、最後に、災害ミュージアムを通じた記憶の継承に有効な方策を提案する。

2. 記憶とその継承

2.1 記憶の概念

物理的な衝撃としての災害は一過性の出来事である。我々が被災経験の継承ということを考える場合、その出来事を経験した個人の内面に、あるいはその出来事が発生した物理的空間に、痕跡として残されている記憶が、どのように継承されるのか、という点を探る必要があるだろう。本節では、記憶が、どのような概念であるのかについて、先行研究から考察する。

記憶について、フランスの社会学者アルヴァックスは、「われわれの外部にある証拠の総体が思い出の恒常的な塊として現れるためには、その総体の中に記憶の種子を持ち込むことが必要なのである」と述べている(アルヴァックス, 2006, p6)。出来事を経験した個人の中には、それに関する何らかの痕跡が残されている。出来事を回想する、誰かに会う、何かを見ることにより、その痕跡は思い出として想起され、認識される。

記憶は個人に属するものであるが、それならば、地震のように同じ出来事を複数の人が経験し

た場合、その出来事を経験した集団の記憶とはどのようなものなのだろうか。

個々人は、学校、職場、趣味のサークルなど同時に複数の集団に属している。「久しぶりに学生時代の友人に会ったら、忘れていた学生時代のことを思い出した」というように、共通の出来事を体験した他者を通し、思い出が想起されることがある。アルヴァックスの「集合的記憶」の概念は、このように、個々人の記憶が集団に支えられていることを示している。

ただし、「大量の共通の思い出は相互に依拠し合っているが、そのうちで、各々の成員に最も強い印象をもって表われるのは、同じ思い出ではない」(アルヴァックス, 2006, p43)というように、個人的記憶は、集合的記憶の側面であり、それは集団の中で個人が占める位置により異なる。

アルヴァックスは、個人的記憶・集合的記憶と対峙するものとして歴史を位置付けており、集合的記憶は、過去からの「連続的な思考の流れ」であり「何ら人為的なものを持たない」という点と、「たくさんある」という点で歴史とは異なると述べている(アルヴァックス, 2006, p88~99)。集合的記憶は、「人間の生命のふつうの長さを超えることはなく、多くの場合、それよりはるかに短いのである」(アルヴァックス, 2006, p98)というように、あくまで生きている人に担われている。

これに対し、ノラは、集合的記憶が「記憶の場」に刻まれることにより、時空間を超えて想起されることを提起している(ノラ, 2002)。ノラは、ほぼ10年の年月と、120人の共同執筆者を動員し、フランス国内の、集合的記憶が根付いている様々な「記憶の場」に残されている記憶をたどることにより、記憶の歴史を構築しようと試みた。「記憶の場」とは、「物質的な場」あるいは空間的な場のみならず、「象徴としての場」「機能としての場」という属性を、程度は異なれども同時に併せもつものである(ノラ, 2002, p48)。例えば、文書館は物質的な場のみならず、想像により象徴的なオーラが与えられることにより記憶の場となる。一分間の、黙とうは、象徴的な場ではあるが、同時に集中的な想起に用いられる(ノラ, 2002,

p48)。

これらの、アルヴァックスやノラの議論においては、集合的記憶はあくまで自然なものとしてされているが、これに対し、集合的記憶が人為的な操作により構築されたものであるとの指摘がみられる(森村, 2006, p22~24)。記憶の操作性については、藤原による戦争の記憶に関する研究にもみられる(藤原, 2004)。戦争は、集団を横断した経験であることから、その記憶についても個人・共同体・民族・国家という異なるレベルを結びつけて捉えることができる。個人の記憶と集団との記憶の関係については、個人の記憶が「民族」や「社会」の記憶と結びつく必然性はなく、共同性や抽象性が高まるほど記憶というよりは、政治的な目的によって操作されるイデオロギーとしての性格も生まれる(藤原, 2004, p49~50)。

記憶の場は、その記憶を継承するという目的で、意図的に創りだされる。記憶の場を創り出す集団が、民族・国家というようなより大きなものになるほど、そこに刻まれる記憶は、抽象的なものとなり、自然なもの、あるいは、多様なもの、というような記憶の特質は薄れていく²⁾。また、中には取捨選択されることにより、忘却されてしまう記憶も、また次節で詳細に述べるが、保存すること自体が忌避され、それにより欠如してしまう記憶もある。

しかしながら、記憶の場に変化の余地があるならば、その場を通し、新たな記憶が想起される可能性がある。ノラが、「記憶の場が存在するのは、その意味がたえず変わり、その枝が予期できないかたちで茂るなかで、変化に対して適応力をもっているからなのである。また、それゆえにこそ記憶の場は情熱を呼ぶのである」(ノラ, 2002, p49)と述べているように、記憶は、時空間を超えて新たな記憶を想起させる点において、無限のパワーを持つのである。

したがって、我々が記憶の継承ということを考える場合、記憶を刻む場が、記憶の想起を促す場となっているのか、ということが重要である。例えば、阪神淡路大震災という出来事についていうならば、「1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起

こった」というように、出来事をそれが起こった年月日とともに事実として、あるいは歴史として刻むのではなく、阪神・淡路大震災の記憶を刻む場が、果たして新たな記憶を想起させる場となっているのか、が重要なのである。

2.2 ミュージアムと記憶

「ミュージアムは意図的に、個人的記憶についても集合的な記憶についても自然本性的な腐食を防ぐために、記憶を物的な形態へとつくりかえる」(クレイン, 2009, p18)。

ミュージアムは、多様な記憶をコレクションとして保存するとともに、展示を通して訪問者に新たな記憶を想起させることが可能である。本節では、記憶とミュージアムの係わりに着目したクレインによる『ミュージアムと記憶—知識の集積/展示の構造学』(クレイン, 2009)を中心に、ミュージアムを通じた記憶の想起について考察する。

クレインの研究は「いかなる仕方において、ミュージアムと記憶は互いを成型するのか」を視点としている(クレイン, 2009, p7)。ミュージアムの歴史に関する議論においては、ミュージアムがさまざまな展示資料に意味を与えるプロセスが重視されていたが、そこには、特定の観衆、公衆、共同体、国家に属することにより客観化され、ミュージアムのコレクションを介して再現される記憶に関する議論が暗黙裡に含まれていた。これに対し、現代の記憶のミュージアムは、「時を凍らせる」ことを目的とし、オブジェの展示を通して「時を超えた状態」を達成しようとしている。ミュージアムでは、記憶を展示物として保存し、固定化する(以下、「記憶の固定化」とする)が、それは、同時にその固定化された展示物を通して新たな想起を促すためでもある(クレイン, 2009, p9~10)。

クレインの研究において、記憶の固定化に伴う課題を示しているのが歴史ミュージアムの展示に焦点をあてたウィルソンの分析である(ウィルソン, 2009)。

ウィルソンは、ロサンジェルスのカウスウエスト・ミュージムに設置された「カリフォルニアの

人びと」というギャラリーについて以下のように考察している。

ある展示ケースの中には、乳児を入れて運ぶ網籠が展示されており、その同じケースの中の異なるカテゴリーに、ゴールド・ラッシュ時のピストル、金の鍋、金の定規、火薬入れなどの物品が展示されている。

この一見何ら違和感を感じさせないような展示に対し、同ミュージアムを訪問するアメリカン・インディアンは嫌悪感を示す。アメリカン・インディアンにとって網籠は、乳幼児のための折りを込めて作られた、儀礼と家族との結びつきを表象するものである。その一方で、ゴールド・ラッシュ時の物品は、ゴールド・ラッシュと時を同じくした先住民の大量殺戮を表象するものであるためである。

この事例は、展示されている物資料が、出来事の記憶を表象する痕跡であり、その記憶は現在のアメリカン・インディアンにも共有されていること、そして、痕跡の展示が記憶の担い手であるアメリカン・インディアンの視点から再構築されていないこと、これらの理由により、展示に対して嫌悪感が想起されることを示している。記憶を固定化するということは、過去の出来事の痕跡を用いて出来事のイメージを創出することではなく、個々の痕跡がどのような記憶を表象しているのかという点を理解し、そのうえで、その記憶の担い手の視点から出来事を留めることなのである。

また、クレインは、トマスによる東京都写真美術館を中心とした写真展の分析を通し（トマス、2009）、記憶の固定化における、記憶の「欠如」という課題を示している。

ここでいう、記憶の「消失」とは、欠落してあるべきところがないが、そこにあることが望まれていることである。「欠如」とは、本来実在しているにもかかわらず、望まれないために不在となっているものがそこにはあることが、言外に意味されることである（クレイン、2009、p19）。例えば、東京都写真美術館において日本の歴史が不在であると指摘するトマスの考察については、日本が「過去と関係をもつこと」を欲していないというこ

とよりも、忌避された過去と関係を持つことを欲していないことが示されていると認定されている。日本では、戦争の記憶は忘却されているのではなく、欠如しているのである。ただし、記憶が欠如すると、その記憶が想起される可能性は掴み取られてしまう。

それでは、ミュージアムはどのようにして記憶を想起させるのか。クレインは、ミュージアムは、主体性と客観性の衝突を喚起させる場であるとしており、「私的なものと公的なもの、個人的なものとの組織的なもの、主観的なものと客観的なもの間の一連の衝突は、ミュージアムと記憶の間に新しい、きわめてエネルギーに満ちた関係性を創出するのである」と述べている（クレイン、2009、p15）。

このような考え方を実現した事例として捉えられるのが、フェーアによる、展示資料に対し、通常とは異なる解釈を提示する「アイロニック・ミュージアム」の展示である（フェーア、2009）。フェーアは、ドイツのハーゲン市のミュージアムの館長に就任した際に、「サイレンス」という題で、なにも展示しないという試みを行ったのである。さらに、クレインは、「ジュラ期において存在しないはずの技術」という不思議な名前を持ち、珍品奇品を展示することにより、訪問者を困惑させる「ジュラシック・テクノロジー・ミュージアム（ウィルソン氏の驚異の陳列室）」の事例を提示している（クレイン、2009）。これらのミュージアムでは、訪問者が展示に対し思い描くイメージとのギャップを生み出すような展示が意図して行われている。展示に対し訪問者が違和感を抱き、それが、訪問者に新たな記憶を想起させ、記憶を動的なものとして浸透させる。

クレイン同様にミュージアムにおける記憶の展示に着目した「人びとの記憶と博物館展示」と題する布谷と安田の対談において、安田は、思想史研究で用いられる「レトロスペクティブ」とその対になる「プロスペクティブ」という言葉を用いて記憶の展示について述べている（布谷・安田、2009、p7～8）。

レトロスペクティブは、「今から振り返ってみれ

ばこう見える」ということであり、プロスペクティブとは、「その時、その時点に立ってみる」ということである。記憶の展示においては、この双方のバランスが重要であるにも関わらず、「今から見れば歴史はこうだった」というかたちで構成された、すなわちレトロスペクティブな展示が多い。一方の、プロスペクティブな展示とは、可能な限りさまざまな資料を用いながら、全体として復元していくものであり、それも細部を詳細にわたり積み重ねるものである。それにより、当時生きていた人びとの想いを想起させる。

以上の議論をまとめると、ミュージアムが、展示を通して記憶を想起させるには、まず、記憶を固定化すること、ただし、出来事を特定の視点から判断し、それに沿う形でイメージを創出するのではなく、記憶の痕跡を記憶の担い手の視点から留めることが重要である。次に、新たな想起を促すために、それを多様な視点から展示として再構築する。例えば、敢えて訪問者にギャップを感じさせるような展示構成とする、あるいは、特定の場面に焦点をあてつつも、それを詳細に細部にわたるまで再現するようなプロスペクティブな展示構成とすることが考えられる。つまり、ミュージアム自らが、記憶を動的に想起させるための媒介(メディア)となることが重要なのである。

3. 災害ミュージアムと記憶

3.1 調査概要

それでは、巨大災害に見舞われた被災地で相次いで設置されている災害ミュージアムは、自らが、記憶を動的に想起させるためのメディアとなっているのであろうか。

災害ミュージアムにおける記憶の展示を把握するために、ミュージアムの調査を実施した。調査を行ったのはいずれも、近年巨大災害の後に設置されたミュージアムである。

調査においては、ミュージアムの概要を把握するとともに、災害という出来事の記憶がどのように展示されているのかという点に着目した。また、展示の視点については、可能な場合は展示に携わる学芸員、運営に携わるスタッフ等に対し、

どのような視点から展示を行っているのかの聞き取りを行った。

記憶の想起と深く関連すると思われる展示としては、以下の3つに着目した。

- ①被災者のメモ書き、音声テープ、災害時に着ていた服、地震により壊れた時計など、出来事に関する個人的記憶を伝える現物資料(一次資料)⁴⁾。
- ②活断層、あるいは地震動により壊れた建物というような、出来事を起こしたハザード現象に関する現物資料(一次資料)。
- ③出来事を伝える写真、映像、文書などの資料(二次資料)である。

現地調査は、主に2008年7月~12月にかけて実施した³⁾。調査結果を表1に記す。

3.2 ミュージアムにおける記憶の展示の考察

調査を行ったミュージアムは、全て災害復興過程において設置されたものであった。そのためほとんどのミュージアムが、地域で起こった災害の記憶の保存、あるいは被災経験の継承を設置の目的として掲げていた。また、映像、写真を駆使した災害のイメージの創出を試みた展示は、全てのミュージアムに共通してみられた。

展示のうち、個々人の記憶を伝える現物資料が多数収集・展示されていたのが、1995年の阪神・淡路大震災後に設置された「人と防災未来センター」であり、災害を起こしたハザード現象の痕跡を中心に展示が構成されていたのが1999年の台湾の集集地震の後に設置された「九二一地震教育園区」であった。

なお、トルコで1999年に起こったマルマラ地震からの復興過程に建てられた「マルマラ地震文化博物館」には被災した小学生から集められた作文が数点展示されている他、犠牲者の名前を記した追悼碑が展示されていた。同じくトルコのカイナシュル市にある「1999.11.12地震・記念情報館」においては、犠牲者の写真とともに、その家族の思い出が展示されていた。また、2004年インド洋津波の被災地であるインドネシアのバンダアチェに建てられている「インド洋津波災害資料館」は、被災者の語りを収録した映像収集を試みていた

表1 災害ミュージアム調査結果概要

国名	日本	トルコ	台湾	インドネシア			
博物館名	阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	マルマラ地震文化博物館	カイナシユル1999.11.12地震記念・情報館	九二一地震教育園區 九二一地震資料展示陳列室	インド洋津波災害資料館(ジャクアラ大学)		
ハザードの種類	地震	地震	地震	地震			
災害名	阪神淡路大震災	コジャエリ地震	デュズジェ・カイナシユル地震	集集地震	スマトラ・アンダマン地震津波		
災害発生日	1995年1月17日	1999年8月17日	1999年11月12日	1999年9月21日	2004年12月26日		
博物館概要	博物館設置年月日	2002年	2004年8月17日	2005年11月12日	2004年9月21日 2001年9月21日	2009年開館予定	
	博物館設置機関	兵庫県・国	アダバザル中央市	カイナシユル市, ADV (NGO)	行政院教育部 台湾省政府	ジャクアラ大学	
	博物館設置運営機関	財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構	アダバザル中央市	カイナシユル市, ADV (NGO)	國立自然科學博物館營運管理 旧台湾省政府	ジャクアラ大学	
	訪問者数	年間約60万人(累計300万人2008年6月)	累計241,182人(1500人/週)	500人/年	2005年 79万人 2006年 44万人 2007年 32万人	不明	まだ開館していない
	主たる訪問者	学生(含む小中学校の修学旅行), 防災担当実務者, 一般市民	アダバザル市民, 初等学校(日本の小中学校に相当), 一般市民	教師, 学生, 防災担当実務者	・学校団体(小中学校の修学旅行) ・その他の団体	一般市民	一般市民
展示概要	主な展示内容	・震災の追体験(地震動を伝える映像, 復興の街並みを再現したジオラマ, 復旧・復興に取り組むひとの映像) ・震災の記憶(ジオラマ, 市民による資料, 語り部) ・防災・減災を学ぶ	・地震発生時の状況を伝える写真を中心とした展示 ・模型(地震により物が散乱した部屋の中の様子) ・作文	・住民により提供された災害の記憶を伝える物の展示 ・被災の記録・復興の記録 ・ハザード現象に関する資料	・地震で倒壊した中学校校舎・競技場などの現物資料の展示 ・現物資料を活用した防災対策や自然現象の説明	地震の成因・被害状況などパネル・映像を用いた解説	現在収集中であるが以下のものを検討 ・被災経験を伝える資料 ・復興に関する資料 ・被災者の声
	展示の目的・視点	阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ, その教訓を未来に生かすことを通じて, 災害文化の形成, 地域防災力の向上, 防災政策の開発支援を図り, 安全・安心な市民協働・減災社会の実現に貢献する	・地震の瞬間の再現 ・被災経験を伝えることにより防災を促進する	・被害の記憶の保存 ・防災のための取組紹介	・教育・学術的資料 ・被害と記憶の保存 ・防災教育 ・復興祈念	再建の成果と未来への展望	・災害の瞬間を再現 ・防災の取り組みを伝える
	展示の特徴	・市民の提供により収集されたモノ資料が展示されている ・多数のボランティアが博物館の運営に関与している ・多数の一次資料(171, 437点)が保存・公開されている ・体験型の展示がみられる	展示の更新を検討中	・地域住民一人一人の記憶を伝えるために, 各家庭から寄贈された写真を展示 ・訪問者が自分のできる取り組みを小学生でもわかるように, わかりやすい防災の取り組みの説明	・地震で倒壊した現物資料が展示の中心にある ・防災教育を重視しており, 体験型の展示が多数ある ・多数のボランティアが博物館の運営に参加している ・開設後も, 展示館が増設され, また, 展示が更新されている	再建をテーマにしており, 被災イメージ, 復建後のイメージのパネルや模型	被災者の声を収集し, デジタルライブラリーとして公開する予定
記憶の展示	①個人的記憶を伝える現物資料の有無	多数有(市民から提供された現物資料が多数有)	少し有(被災児童から提供された絵画と作文数点)	少し有(市民から提供された写真)	無	無	
	②ハザード現象を伝える現物資料の有無	無	無	無	有(地震を起こした活断層, 倒壊した学校校舎など)	有(津波で全壊した病院が施設に隣接)	
	③出来事を伝える写真・映像などの二次資料の有無	有(写真・文書・映像・図書など)	有(写真・文書・新聞など)	有(写真・文書)	有(写真・文書)	有(写真)	有(被災者のインタビュー記録映像・写真・図書・紙資料)
調査者	阪本真由美	木村周平	阪本真由美	松多信尚	松多信尚	阪本真由美	
回答者	阪本真由美	Ertuğrul Erdem (アダバザル中央市助役)	Gulgun Tezgider (ADV)	松多信尚, 黄嘉慧 (日本語解説員)	松多信尚	Dirhamsha ジャクアラ大学教授	

(ただし、作成中のため展示は行われていない)。このように、一次資料ではないものの、個々人の記憶を伝えるための展示は複数のミュージアムで行われていた。

ここでは、特に一次資料による記憶の展示数および展示面積が大きかった「人と防災未来センター」および「九二一地震教育園區」に着目し、この二つのミュージアムにおける記憶の展示について詳細に述べる。

1) 人と防災未来センター

人と防災未来センターは、1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災という出来事とそれによる教訓を伝えるという目的で2002年4月に日本国政府と兵庫県により設置された。センターは、展示、資料の収集・保存のみならず、若手研究者の育成など多様な事業を実施している。展示部分は年間50万人以上の訪問者が訪れている。

展示は、地震を追体験する映像を上映するシアター（4階）、震災直後の町並みを再現したジオラマ（4階）、一人の少女が震災を乗り越えて成長していくストーリーを上映するシアター（4階）、市民により提供された災害の個人的記憶・集合的記憶を展示するコーナー（3階）、震災からの復興をたどるコーナー、語り部からの話を聞くコーナー（3階）、様々な防災・減災策について実体験する防災・減災体験のフロア（2階）から構成されている。入館とともにエレベーターで4階へと案内され、4階から順に下の階へと観覧する。

同センターは、調査を行ったミュージアムの中では最も多く記憶に関する現物資料を保有している。阪神・淡路大震災の被災者などから集められた一次資料が約17万点、二次資料が約3万4千点保存されている。これらの資料の多くは、阪神・淡路大震災の後に、市民から収集されたものである。

阪神・淡路大震災の復興過程においては、災害の記憶を伝える多様な資料を収集するために、様々な取り組みが行われた(佐々木, 2006)。行政も資料収集に取り組み、1996年10月には、兵庫県の外郭団体である(財)21世紀ひょうご創造協会

が、その後は(財)阪神・淡路大震災記念協会がその業務を引き継ぎ、その資料が現在同センターに保存されている(神戸大学, 2007)。

これらの収蔵資料から選定された約800点が3階フロアの壁面に展示されている。その他の資料は、5階の資料室を通し閲覧することができる。

同センターにおける記憶の展示については、「震災一次資料の展示が総合的には『教訓』としてしか位置付けられていない」「震災というできごとのすべてを展示しているようでありながら、実際には震災のごく一面を一方的に伝えるものでしかなかった」(笠原, 2009, p10~11)との指摘がみられる。なぜ、記憶の展示が「教訓としてしか位置付けられていない」と捉えられているのだろうか。3階フロアにおける記憶の展示から判断すると、以下の理由が考えられる。

まず、記憶の展示が行われている3階フロアは、4階で地震の映像、地震直後の街並みのジオラマ、復興していく町と少女の映像というように地震をはじめとする一連のストーリーが完結した後に訪れる。そのため、4階フロアで映像を通して見たイメージを補完するものとして記憶の展示が位置付けられてしまう点である。

次に、記憶を伝える資料が、「避難生活」「ボランティア」というようなタイトルの下で、特定のストーリーの下に集約され、再構成された写真とともに、展示されている点である。つまり、展示が、記憶の担い手である個々人の視点からは再構築されておらず、かつ、災害という出来事の全体を浮かび上がらすものとしても位置付けられていない点である。

その一方で、同センターにおける、記憶の位置づけを興味深いものとしているのが「語り部」の存在である。現在、自らが被災した語り部37名が、ボランティアとして災害に関する思い出を訪問者に語っている。これらの語り部の「語り」に着目した高野らの研究では、展示と語り部の語りとの相互関係が分析されている(高野他, 2007)。

高野らは、センターで行われている展示を「公的な事実」として、そして語り部の語りを「私的な語り」として位置づけており、聞き手が震災の

語り部という役割に期待する「震災なるもの」の語りとは異なる語りが聞かれることがあり、また、語り部が聞き手に期待する反応が聞かれないことを「対話の綻び」としている。そして、公的な震災のストーリーと、私的な体験談との間のズレから生じる対話の綻びによって、震災を経験していない人が「それは私にも起こるかもしれない」「わたしかもしれない」と感じる可能性を生み出すと述べている（高野他，2007，p193～195）。

第2章で述べたように、展示に対し訪問者が違和感を抱くことは、訪問者に新たな記憶を想起させるきっかけとなる。語り部による語り、自らの思い出を伝えるのみならず、訪問者が展示に対し思い描くイメージとのギャップを生み出すものとして機能することにより、想起が促される可能性がある。

2) 九二一地震教育園區

台湾の「九二一地震教育園區」は、1999年9月21日に起こった、集集地震という出来事を伝える目的で地震から5年後の2004年9月2日に開館した。展示の空間面積という点においては、調査したミュージアムの中では最大のものであり、全壊した中学校校舎や競技場、それを横断する活断層というような現物資料が、補修を施された後に展示として取り入れられている。開館時に比べてやや少なくなつたものの、今でも、年間約30万人を越す人びとが同館を訪れている。

ミュージアムは、車籠埔断層保存館、地震工学教育館、映像館、防災教育館、再建記録館という5館から構成されている。入ると、最初に校庭を横断する活断層を展示する車籠埔断層保存館がある。そこでは、表面断層に加え、地下断層の説明が、災害の痕跡でもある活断層を用いて行われている。次いで、地震工学教育館では、耐震補修が施された倒壊した中学校校舎が視察できるようになっており、様々な耐震補修方法が紹介されている。続く映像館では、災害とそこからの復興の軌跡を映像を通して見ることができる。また、地震動を疑似体験をできるシアターや様々なハザードの映像上映するシアターも設置されている。さら

に、瓦礫の中の状況を体験するコーナーをはじめとする防災教育のための防災教育館、地域の自然と復興を記した再建記録館がある。

展示の中心にあるのは、地震を引き起こした活断層とそれにより破壊された校庭や校舎そのものである。これらの痕跡はそれ自体が、災害に関する記憶を想起させる。

その一方で、被災者のメモ書き、音声テープなどの、個人的記憶やその想起と密接に係わると思われる資料の展示は行われていない。館長と学芸員に対し、その点を確認したところ、開館当初は個々人の記憶を伝える資料を展示していたが、地域の人々から、当時の記憶を思い出すことからミュージアムを訪れるのがつらい、ミュージアムを訪れると悲しい気持ちになる、というような意見が寄せられたことから、個々人の記憶の展示はなくしたとのことであった。

同館の設立経緯については、松多による考察が詳しいが（阪本他，2009）、ミュージアム設置過程において地域住民の理解を得るために、協議が繰り返して行われており、住民の要望を汲んだ展示構成とせざるを得なかったことが推察される。

現在では、ミュージアムに対する地域住民の理解は深く、地域住民は入館料が無料ということもあり、教育の場、交流の場、観光名所として活用されている。また、交流ボランティアとしても、地域の人々がミュージアムの活動を支えている。

このように、同ミュージアムにおいては、個人的記憶が「欠如」している、すなわち、本来実在しているにもかかわらず、望まれないために不在となっている。個人的記憶の欠如は、地域住民との共生を選ぶことにより、導きだされた結論だったのである。

4. おわりに

本研究においては、災害の記憶に着目し、記憶の想起について、災害ミュージアムにおける記憶の展示を通して検討した。

災害ミュージアムは、災害という出来事の記憶を保存するとともに、新たな記憶を想起させるメディアとして機能し得るが、そのためには、出来

事を年月日とともに刻む、あるいは、出来事についての創り上げられたイメージを展示するのではなく、その記憶を伝える痕跡を用いて出来事が起こった時代背景とともに細部にわたり再現するようなプロスペクティブな展示や、展示と訪問者が抱くイメージとの間に何らかのギャップを抱かせるような展示構成とすることが重要である。

今回調査を行った災害ミュージアムの多くは、映像や写真などを活用して、災害のイメージを創出しているものの、災害という出来事の記憶に着目した展示を行っているミュージアムは多くはなかった。その中で、個人的記憶の現物資料の展示は「人と防災未来センター」において、また、ハザード現象を伝える現物資料の展示は「九二一地震教育園區」においてみられた。

ただし、「九二一地震教育園區」については、個人的記憶は欠如しており、それゆえ永遠に失われてしまう可能性があり、一方、「人と防災未来センター」については、個人的記憶の現物資料が展示に活かされていないという課題がみられた。また、語り部と訪問者が織りなす記憶のギャップは、語りの内容に左右されるというような不確実なものである。これらのミュージアムが、記憶を動的に想起させるメディアとなるためには、現在行われている記憶の展示を、より一層拡充させていくことが必要である。

最後に本研究により得られた知見をもとに、記憶の想起を促すような展示として以下のものを提案する。

第一に、災害とは、地震や台風などのハザードが、社会に及ぼす様々な影響のことを指す。従って、ハザードが、そこに住む人々の生活にどのような影響をもたらしたのかという視点から、災害の記憶を留める多様な痕跡を活用して、時代背景とともに、その出来事が起こった場としてできる限り詳細に再現することが重要である。展示を創り出す過程において、可能な限りその出来事を体験した人の参加を得て、その視点から再現する。また、視覚だけではなく、触れる、聞くというように、五感を通し展示を感じることができるようにすることも重要である。

第二に、出来事に関する多様な記憶を展示することである。災害の展示においては「威力」「破壊」「恐怖」「悲しみ」「つらさ」などのイメージの下で展示資料が再構築されているものがあるが、被災者の災害に対する想いは多様なものである。特定のイメージに偏らない、多様な視点からの展示が必要である。

第三に、出来事に対する想起を促すために以上の展示を行ったうえで、災害による被害を軽減するために、正しいハザードの解説、災害による被害を軽減するための災害対策を、研究者の視点から提示することである。なぜなら、記憶の展示は、災害という出来事を伝えるものではあるものの、災害対策に求められる知見を伝えるとは限らないからである。

このように、災害という出来事についての多様な記憶を、集団-個人、公的-私的、研究者-学習者というように多様な視点から示すことにより、災害ミュージアムを通し新たな想起が促され、それにより被災経験の継承が可能になるだろう。

本稿を閉じるにあたって、本研究のテーマである記憶については、社会学、哲学、心理学などの多様な研究分野において膨大な研究が行われていることを明記しておく。本研究は、それらのすべてをカバーするものでももちろんなく、ミュージアムの展示を通した災害の記憶の継承という点に着目し、主に地震災害のミュージアムについて限定的な考察を行ったものである。ハザードにより記憶の伝え方が異なるのか、ミュージアム以外の記憶の場を通した、記憶の伝え方にはどのようなものがあるのか、などの点については、今後の研究課題としたい。

謝 辞

本研究の災害ミュージアム調査の一部については、京都大学グローバル COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の「次世代研究イニシアティブ研究助成」を受けて行われました。同研究並びに現地調査におきましては、木村周平様(富士常葉大学)をはじめ、松多信尚様(台湾大学)、松岡格様(東京大学大学院)に様々なご協力・

ご支援・ご指導を賜りました。ここに、感謝の意を表します。また、阪神・淡路大震災の調査においてご協力を賜りました、佐々木和子様（神戸大学）、末松憲子様・高野尚子様（阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料専門員）に厚く御礼申し上げます。

なお、本論文の内容はすべて執筆者の個人的な見解であり、執筆者所属先の公式見解を示すものではありません。

補 注

- 1) ここでいう、災害ミュージアムとは、災害に関する資料の保存・展示を行っている施設のことであり、日本の博物館法により制定された登録博物館、博物館相当施設、博物館類似施設にこだわらない。なお、英語の「ミュージアム(museum)」という言葉は、日本語の博物館・美術館などを包括する言葉であることから、ここでは、ミュージアムという言葉を用いている。
- 2) 前掲のアルヴァックスの記憶の概念に基づく。
- 3) 調査対象としたのは、過去15年前後の間に発生した自然災害の後に設置されたミュージアムである。現地調査のうちトルコについては、木村周平（富士常葉大学）が、また、台湾については松多信尚（台湾大学）が調査を実施した（阪本他、2009）。なお、両ミュージアムともに、著者（阪本）が追加調査を実施し、このうち台湾については、松多とともに調査を実施した。なお、野島断層保存館をはじめ、現地調査を行ったものの、分析に必要な情報が得られなかったため、本論文の分析対象となっていないミュージアムがあることを補足しておく。
- 4) ミュージアムに展示される資料は、一次資料と二次資料とに区分される。一次資料とは、実物あるいは現象に関する現物資料であり、希少性の高い資料のことを指す。また、一次資料を収集していく過程で収集されるものが二次資料であり、写真、記録、録音、計測、模写がこれに該当する。本研究では、個々人の記憶を表象する現物資料及びハザード現象に関する現物資料を一次資料として位置付けている。

参考文献

モーリス・アルヴァックス（小関藤一郎訳）集会的記憶（第3刷）、行路社、2006。

ダイアナ・ドレイク・ウィルソン：記憶の現実化、歴史の変容化—ユーロ/アメリカ/インディアンズ、ミュージアムと記憶—知識の集積/展示の構造学（スーザン・A・クレイン編著）、ありな書房、2009、p149-185。

笠原一人（寺田匡宏編）：記憶表現論、昭和堂、2009。神戸大学文学部：平成18年度事業報告書歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業（5）別冊「災害利用・震災資料の保存・活用に関する研究会」、2007。

スーザン・A・クレイン編著（伊藤博昭監訳）：ミュージアムと記憶—知識の集積/展示の構造学、ありな書房、2009。

阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡 格・矢守克也：地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究—トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から—、京都大学防災研究所年報52号、2009、p181-194。

佐々木和子：アーカイブズが生まれる、アーカイブズ学研究、No4、日本アーカイブズ学会、2006、p21-372。

高野尚子・渥美公秀：阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察—対話のほころびを巡って、実験社会心理学研究、第46巻第2号、2007年、p185-197。

ジュリア・アデニー・トマス：歴史と反歴史—写真展と日本のナショナル・アイデンティティ、ミュージアムと記憶—知識の集積/展示の構造学（スーザン・A・クレイン編著）、ありな書房、2009、p119-147。

布谷知夫・安田常雄：人々の記憶と博物館展示、歴史博、No152、2009、p6-11。

ピエール・ノラ（谷川稔監訳）：記憶の場、岩波書店、2002。

ミヒャエル・フェーア：あるミュージアムとその記憶—歴史を回復する技/術、ミュージアムと記憶—知識の集積/展示の構造学（スーザン・A・クレイン編著）、ありな書房、2009、p51-84。

藤原帰一：戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在、講談社現代新書、2004。

森村敏己編：視覚表象と集会的記憶—歴史・現在・戦争、旬報社、2006。

（投稿受理：平成21年7月27日

訂正稿受理：平成22年5月31日）